（資料）

ジョヴァンニ・バッティスタ・アグッキ作「アンニーバレ・カラッチ作《眠れるヴィーナス》の叙述」翻訳

浦　上　雅　司*

〔以下に訳するのは、17 世紀初頭のローマを代表する文人の一人ジョヴァンニ・バッティスタ・アグッキ（Giovanni Battista Agucchi）が著述した、アンニーバレ・カラッチの絵画（現在、フランス、シャンティーユ、コンデ美術館蔵：図版参照のこと）の「叙述」である。これは 17 世紀初頭のローマで成立した詳細な絵画叙述として興味深いのだが、その成立の経緯や歴史的意義については当論叢に収録された拙論（「近世イタリアにおける絵画叙述とアグッキ」p.1-34）を参照されたい。〕

私も含めて、もっと若い頃に、人生に必要なこと、有益なことを学ばなかったと後悔する者はいくらもいるだろうか、過日、私は、絵を描くこと（必要からしても、職業からしても私と全くかけ離れている）に無知なのをとりわけ深く悔やんだ。アンニーバレ・カラッチ氏が神々しくも絵画に表わしたタッソーの物語を見にファルネーゼ邸館に赴いたおり、予想していなかった別の絵を見たのである。その絵は完全な仕上がりではないがかなりの程度まで完成されており、これ以上に望むべきところはほとんど無いように見受けられた。考案はもちろん素描も彩色も、この絵がとても気に入ったので、私は、絵画に全く造詣のない者には希なほど、その絵をたんねんに鑑賞した。そして私は、この絵の模写を持ち帰りたいという願望に捕らわれたのである。この絵は大きいが、その詳細な素描を手に入れ

* 福岡大学人文学部教授

なければ立ち去り難く思われた。貴重なものにふさわしくその素描は、この絵を私の想像のうちに生き生きと保ち続ける一助となってくれただろうし、遠くに住んでいたり、所用があったりしてこの絵を見ることができない友人たちに、この絵を伝える役にも立ったことだろう。こうした考えに満たされて帰宅した私は、他の娯楽に耽ることなく、その日と翌日、葡萄の収穫期にあたって主人が留守にしており、しばし寛げる時であったのを幸いに、素描の技術がないのをペンの勤勉さで埋め合わせて、他の方法では私には表現出来ようもないこの絵を紙面に叙述することにした。かくして、このささやかな叙述を起草したのである。もちろん、非才の身には、際立った芸術作品を表現することはもとより、なんとか思い浮かばせるだけでも難儀である。私は実際の作品に迫り得ないし、遠く及ばないことは十分に承知しているが、厚い布に覆われた絵を鑑賞者に垣間見せるほどの出来栄えと思う。読者もそのように受けとって頂きたい。

さて、この見事な絵はやや大きめの板に描かれているが、かなりの広さの風景を描くのに十分な大きさである。つまり幅が高さの二倍ほどあるのだ。横幅が 15 パルモないし 16 パルモであるから、もし間違えなければ、高さは 7 パルモか 8 パルモしかない。さて、鑑賞者の目には、この絵はキプロスかキテリア（シテール）、パッソス、クニドス、あるいはどこか他の、ヴィーナス女神に奉献された、あるいは女神に愛された島の快く祝福された場所を描いているように思われる。それゆえに、女神はこの場所に横たわり眠っているのだが、見事に設えられた上品な屋外ベッドの上で実に静かで穏やかな様子だ。女神には一群のアモール達が付き従っているが、彼らは、女神の支配地で彼女に絶えず奉仕するのである。アモールたちは、女神が休息を取るあいだは女主人への奉仕から解放され、様々に戯れたり遊んだりして気晴らしをしている。心地好い緑の広場のあちこちにいるのだが、上手に散らばっていて、立派な体格の子供の姿をしたプットーが 28 人もいるのだが、誰も他の者の邪魔をしてはいない。緑地はずっと平らで、心地好く、草木で覆われている。数え切れないほど様々な種類の見事な木々と共に、瑞々しく細やかな芝生が広がっている。その間には赤や紫や黄色の花々や、それ以外にも実に様々な美しい花々が顔を覗かせている。また、巧みな自然が見事な技巧によって木々の間に作り出した隙間からは、数々の美しい花の向こうに、はるか遠くの風景が垣間見えているが、大地や砂浜、磯の向こうに幾隻かの小舟が浮かぶ静かな海原が見え、さらに大きな山々や断崖が青々とした大気や海面からくっきりと浮かび上がり、最も遠いところは 50 里か 100 里ほどの距離だろうと想像されるようである。近いところでは、明るい紺碧の地に木々の緑が際立っている。木々の

暗い幹との対比によっても、その優美さと明るさはよく表現されている。

さて、そのうちの二本が画面の両脇に配されており、他よりも近くにあるので、他の木立に比べてより大きく、より力強く見える。二本の木はその茂みの陰で、女神の快適な寝台を覆っているが、その木陰には、賑やかに戯れ合うアモールたちの姿も見える。寝台の頭部は画面の左端にあり、寝台に寝そべる人は誰であれ、右側からふんだんに降り注ぐ陽光を顔に受けるようになっている。だが、日中の数時間は先に挙げた木の茂みが疎ら過ぎたり、木陰が足りなかったりすると、陽光がきつ過ぎるかもしれない。そこで木陰の代わりに、最も近い木の緑濃い頂きから、紫に近い微妙な色のごく薄い布が下がっている。この布は、いっぱいに広げて枝に沿って伸ばせば、寝台を陰で覆う本物の天幕の役割を果たす。寝台も、野外で用いるのにふさわしい簡素なものではなく、簡単ではあるが飾りが施されている。寝台は深紅のビロードで金糸の縁取りが施された見事なカヴァーで覆われている。その傍らには枕の代わりに、四隅に房のついた、かなりの幅の金色の縁取りがされたクッションがある。そしてこの上に裸体のヴィーナスが横たわっているのだが、その肢体は並みより大きく、まさに神々しい美しさである。女神は完全に横たわっているわけでも、座っているわけでもない。体の半ば、背中の大部分をクッションにもたせかけ上体を起こして、下半身をまことに優美に寝台に伸ばしているのだが、脚と膝を少しだけ引き寄せている。そのせいで、脚と同様に腰や脇腹も、その豊かな丸みがよく見えている。というのは、両脚をそろえていたならば、当然のことながら、片方の膝と太股がもう片方を隠してしまっていただろうからである。女神は眠ってはいるが、美しさを隠そうともせず、実に優美な姿勢で、右脚を左脚のアキレス腱のあたりに交差させているように見受けられる。こうした姿勢をとって女神は片方の膝と太股を自分の方に引き寄せており、右側が左よりもはっきりと現れているが、どちらも明瞭に、あたかも浮き彫りのように遮るものなく眺められる。また右足の指はそろって左足の下から覗いており、そのためいっそう輝くように白く、またほの赤く浮き立っている。だが、何よりも際だっているのは、彼女が、腕も身体も意識して寝そべっている、その様子である。というのは、彼女はつねに誰からも美しいと賞賛されていたので、眠っている間でさえも、その美しさを感嘆されたいと願っただろうからである。優れた画家に描かれることを予感していたからこそ、敢えてこうした姿勢で眠ったかのように、私には思われる。あるいは、その日、ヴィーナスは、逞しいマルス神か、誰かほかの気に入った神がやってきて脇に横たわることを多少は期待していたのかもしれない。また頭の後ろからベッドの右側におかれた枕は柔らかく女神の四肢を

受けとめている。彼女は脇腹を伸ばして肩で枕にもたれかかり、お尻の片側に体重をかけている。それで左側のお尻と背中が僅かに持ち上がっており、ベッドに身体を伸ばしていないために生じた、おなかの窪みなどでは、みずみずしい茶色がかった肌色に何がしかの輝きが混じっているが、それがカーテンの反映なのか、生まれつきの輝くような白い肌のために生じたことなのかはわからない。ともあれ、そこでは影の部分がほの明るくなっいる。すべての人々が気づくことではないし、興味を持つ者も少なかろうが、柔らかな羽毛布団がお尻におされて柔らかく窪んでいる。全てを見逃すまいとすれば、それだけ、詳細に見えるものなのだ。さて、女神は、このように目立つ姿勢で横たわっているのだが、肘を上げて左腕を頭の後ろに回しており、手のひらは右のこめかみと耳の向こうに見えている。それはあたかも、柔らかいクッションが彼女にとっては十分に柔らかくふさわしい枕ではないかのようである。ここからバラ色の指がのぞいているのだが、それはやはりバラ色の頬と競い合っているかのようである。さらに右肘を優美に、滑らかなシーツ飾りに持たせかけ、腕は優しく太股に添えて、両太股の間に優美な手がおかれている。こうしたことどもからよくわかることだが、女神は実に優美かつ巧みに、顔や首筋、喉や腕、手だけでなく、露になった脇腹や胸、乳房、腹、太股と脚、そして足先までも人目にさらしており、見る者に隠されたところなど全くない。彼女は、実に巧みに、自然と羞恥心とが隠すことを求める部分、人が見てはならない部分だけを隠しているように見受けられる。だが、容貌が実に美しいことは、どのようなイデアから画家が各部分の見事な均衡を取り出したのか、想像もつかない。ごく細かい部分までたとえようもなく美しく、天界の住人にふさわしいみずみずしさを湛えており、この女性像を眺めることは喜びどころか、驚異ですらある。したがって、この美しさを記述しようと思う者は、長く、きわめて困難な作業に取り組むことになる。というのは、その美があまりにも完璧であるがゆえに、ペンはそれを記述するのに及ばないのである。自然を超えた優美さと洗練さを備えた女神は、実に気高い雰囲気を漂わせ、実に高貴で威厳に満ちた顔立ちであることだけは述べておきたい。もちろん決して猥雑ではなく優美である。もし君が、誰の顔だかわからなくても、女神であり、しかも美の女神であるという彼女にふさわしい呼び名でしか呼べないことだろう。女神は目を閉じているが優美さは少しも損なわれていない。それだから、彼女は軽く心地よい眠りにおちているのに生気あふれるバラ色の頬は少しも色あせておらず、また輝くような優雅さも失せていないのだと、君に感じさせる。この輝くような優雅さは、かんばせだけでなく身体の全体にふんだんに満ちあふれているが、それは、ミルクや真珠の輝くよう

な白さに、部分によって濃淡はあるものの、例のバラ色が混じって生み出されている。顔立ちをのぞいて、彼女の姿勢がひどく技巧的すぎると感じられるかもしれないが、君も女神が深い考えもなしに頭を持たせかけているとは思わないだろう。つまり、彼女は、明るい光が目に当たって眠りの邪魔をされないように考えているのだし、また、顔の全体が影になると、その美しさが損なわれることにもなるだろう。それで彼女は、半ばまで巧みに広げられた天幕による影が顔立ちの目から上の部分を覆うような、そのような姿勢で休息している。つまり影の部分は深い眠りを示しながら顔の残りの部分は明るく照らされて見えるのだ。しかしながら、このように閉じられた目は、白くて薄い瞼の下から、名状しがたい輝きを発散しており、そのために、影の部分も明るい部分に決して引けをとってはいない。額も決して輝くような白さを失ってはいないしその上の優雅に組まれた金髪も見事である。残った長い髪を頭にまとめる豪華な金のネットも負けず劣らず見る者を魅了するが金髪の輝きを凌駕してはいない。むしろこのネットは巻き毛の魅力を増しているのだが、巻き毛がほどけて明るい光に照らされれば、首筋で輝くことだろう。ともあれ、この部分は、画家の技巧と光とが見事に調和した実に美しい部分である。それでも、これらの部分を丹念に見る者は確信することだろうが、この美しいかんばせは、薄く影になっていることが無ければいっそう美しく見えることだろう。そして、（それができる人であれば）実際よりもさらに魅力的なかんばせ、極めつけの美しさを表わせよう。だが、女神の顔立ちの驚くほど見事な釣り合いを逐一表現することは、私の気が向かない。ましてや、身体の見事な調和や、そこから生まれるたぐい希な美しさを表現する筆を執ることなど、なおさらである。というのは、そうしたことを長々と論じても真実に達しなければ、茫漠たる主題をごく僅かな限られた言葉に押し込めてしまうのだ。完璧な女性美の記述を達成しようと苦労する人々は多いが、成功した者は未だかつてない。女性美の調和と統一性はもとより、女性美について考察すべきその他の驚異的なことどもも欠けている。君が色白の首筋を入念に見れば、そのゆったりとした隆起の甘美さに感嘆するだろう。雪のような首筋の記述に不満が残るなら、その上にもつれかかる金髪やそれを際だたせる象牙色の肌の優美さにはいっそう満足できないだろう。胸にはまるで二つの小さな丘のように、実にみずみずしくまん丸な乳房が盛り上がっているのが見えるが、どれほど硬くあるいは柔らかいのかは分かりかねる。さらに、横たわっている肉体を、次第に脇腹へとたどっていけば、硬い部分と柔らかい部分とが入り交じっているように見受けられるが、全体としては柔らかさが勝っている。それゆえに腰を曲げているところでは優雅な陰をなすかすかな窪みが生

じているのだ。だが、上に伸ばして曲げられた肘にさえ認められる柔らかさから、私が多言を弄しなくても、残りの腕や繊細な手の柔らかさは推して知られるだろう。真っ白で繊細な腕や手に、さらなる美をつけ加えられようか。余計なものをつけ加えるか、貶めていると思われるのが関の山だろう。ましてや、柔軟で優美な丸みを帯びた肉体の様や脇腹や腰や脚のみずみずしさを、ほかの人々の目にまざまざと示すやり方があろうとは思えない。読者の眼前に、生きているままの姿、驚嘆すべき天上界の姿がまざまざと示されているのだと説得する以外ないだろう。だからこそ、人によっては一般的な肉体の繊細さを論じ、それに続けて強烈な赤のビロード地を語るのである。ヴィーナスの四肢から放たれる、輝くような美しさは、確かに、硬いアラバスターか象牙のようにも見えるだろう。だが、柔らかく身体のあちこちを曲げている様子の自然さ、方々に小さな窪みを形成しつつ陰になった部分のみずみずしさをよく見れば、見る人はきっと肢体の滑らかさに思い至るだろう。感覚と視覚を惑わされる間に、かくも多様な特徴が渾然一体となっているのを認めて、実際にどうなのか、触ってみたいという願望に襲われることだろう。画面に近づきすぎて女神の眠りを妨げてしまうのではないかと、女神の壮麗さに畏れを抱くかもしれない。気高い女神の美しさに見飽きることはないが、彼女を取りまく可愛いアモールたちを眺めても、喜びは尽きないだろう。

広いベッド上に何人か侍っているアモレット（小童）たちは女神の威厳を高め、その美しさを引き立たせている。小童の一人は天幕の陰にあって女神の枕元に立っている。天幕を支えるのが彼の役目で、女神の目から上の部分がちゃんと陰になるように左手を女神の顔の前に伸ばして天幕を持っている。この子はじっと黙って立ち、日の光が動いたらそれにつれて少しずつ天幕をずらそうと、しっかり見張っている。彼はこんな所にいて決して大満足な訳ではないし、緑野を自由に遊び回る他の小童たちを多少は羨んでいる雰囲気を感じさせる。この小童が、注意深く陰を作っているものの、しばしば他の小童たちの方を眺めて、明らかに嘆いている様子に気づく。さて、さらに幼くずっと繊細な体つきの別の小童（おそらく女神に特別寵愛され可愛がられたのだろうが）は女神の足下にいて、短い腕を枕にして眠り込んでいる。女神の優美な脚の向こう側にその頭があり、体は緩やかに曲げられた女神の脚の間にかいま見える。脚の陰になっても幼い肢体は女神のそれと見事に対比されている。だが、この子の眠る様とキプロスの女神の眠る様子は全く違う。女神の眠りは柔和で軽やかで今にも目覚めそうであるのに、幼子のそれは深く重々しく、顔色も青ざめ目蓋も重く閉ざし四肢もまったく持ち上げていないし、表情も精神の動きを感じ

させることなくまったく無表情で閉ざされている。これは全く深い眠りに落ち込みほとんど寝返りもうたない子供にふさわしい有様である。周囲で遊び回るアモールたちの様々な声も二人の深い眠りを妨げていない。小鳥のさえずりや小川のせせらぎが眠気を誘うのはよくあるが、それと同様である。さて、ベッドの左縁と画面の下縁との間にある空間には、その左端から始めるとすれば、まず二人のクピドがいて女神の威厳あふれる堂々とした歩き方を子供っぽく精一杯まねしている。一人は金髪を頭でまとめて花で飾り、肩から背中にかけてまるでマントのように様々な色の薄絹で作られた女神のエプロンを掛けてその裾を地面に引きずっている。女神のエプロンはクピドには長すぎるのでかなりの部分が地面に垂れているのだ。このクピドはまた緋色のビロードで作られた女神のスリッパを履いており、一輪のバラの花を右手に持って脇に垂らしている。胸を張ってしずしずと歩き去ろうとする様子は婚礼に向かう花嫁のようであり、実際、女性としての威厳と気品を保つべく、つまずいて転んだりしない用心に左手を相棒の右手に預けている。この相棒は先導役を勤めるべくその脇に寄り添って歩いている。その身振りや様子から、最初のクピドを頭の足りないとぼけた奴と思いこむかもしれないし、同様にその相棒は、やや紅潮した肌色や鈍い色の金髪だし目つきもずるそうで、抜け目なく見えるかもしれない。このクピドは相手に仕えるふりをしながら笑いものにしているのである。その様子はまるで彼が説得して相棒に女神の格好をさせ、笑いものにしていっそう楽しんでいるかのようである。下半身がとぼけた相棒の陰に隠れているからこそ、この悪戯なクピドの顔立ちと上半身はいっそう際立っている。この二人がこうして戯れている傍らには、別のクピドがおり、二人と同じ考えで遊んでいる。このクピドは、単純素朴で女神を真似て熱心に髪をカールさせているが、左脚が右足の上に来るように両脚を曲げて小さな草むらに座り、飾り彫りの施された金の化粧箱（髪を扱う道具がここに全て納められている）に立てかけた鏡に向かって屈み込んでいる。クピドは左手で髪の毛を掴み、右手で丁寧に丸めて、ガラス製の筒に巻き付けている。見てわかるように、クピドは鏡に見入り、仕事に没頭している。鏡にはクピドが映っている。クピドは鏡を見ながら手を動かしているが、その様子は、どんなに強く恋いこがれるうら若き乙女でも、これほど熱心に身を整えはしないと思わせるほどである。その傍にいる別の二人のクピドは、同じように草むらに座り込んではいるが、その考えと行いはずいぶん違っている。画面の手前にいるクピドはこちらに向いて座り、脇腹から右脚にかけて日に照らされている。左脚は右足の下で曲げている。もう一人は背中に日を受けて右脇腹がこちらに見えている。こちらのクピドがやや大柄で腕白であり、力ある

者が正しいのだとでも言いたげに、相手のクピドからバラの髪飾りを取り上げようとしている。そのために左手で相手の右側の頭髪を掴み、右腕で強く乱暴に押して、相手の左脇に腕を伸ばしている。そこには、左脇に隠された髪飾りをどうしても奪おうという意図が見える。「その花飾りをよこせ」という激しい声が聞こえそうな雰囲気である。相手のクピドは左手を背中に回して精一杯花飾りを隠そうとしている。このクピドは、大声を出すだけでなく相手から身をそらし、右腕を左側によじって、隙があれば相手の顔に平手打ちをお見舞いしようと構えているようにも思える。このクピドが泣き出さんばかりにおびえているのを見ると、誰もが憐憫の情に駆られ、二人が仲直りするよう仲介役を買って出ようとするだろう。これに比べれば、彼らの側に立つクピドは全く穏やかな雰囲気でたたずんでおり、落ち着いた気持ちで眺められる。このクピドはベッドの左隅に背中と左肩をもたせかけ、地面に滑り落ちた深紅のベッド・カバーの端を踏んで立っている。このクピドは真っ赤なほっぺたをふくらませ、頭には、幼いバッコスのように、ツタの冠をかぶっている。首をごくわずか傾けているが、体は真っ直ぐに伸ばしており、太った肉体は血色もよい。彼は眼差しを宙にさまよわせ、笛で甘美な旋律を奏でるのに没頭している。傍らでバラを奪い合っている二人のクピドにも、全く無関心な様子である。彼は二人のクピドの争いに全く関わっておらず、あらゆる雑念を捨て去った甘美な静謐さは際だっている。だが、実際のところ、このクピドが楽しげな笛の音に没頭するにはそれなりの理由がある。というのは先に言及した木立の陰に隠れた仲間の小童が二人で手を取り合って笛の音に合わせてにぎやかに踊っており、自分に感謝する仲間がいるとわかっているからである。踊っている小童のうち右手にいる者は足の運びに注意している様子だが、踊りに不慣れだからそうしているのだと思う者はいないだろう。連れがこの小童の方を向いて、その動きを眺めているが、それも相棒の運脚を正そうとか、逆にそれを学ぼうとかするのではない。彼らは、日に夜を次いで踊ったり歌ったりするアモール学校で学んだのであり、皆が生まれつき踊りの名手なのは確かだ。つまり彼らは、ムーア風とか気まぐれ風と呼ばれるたぐいの踊りを踊っている様子なのである。それで奇妙ではあっても節度を保って体を捻っている。さて前者は頭を前に傾けて背中を丸め、体とともに足を高く上げてから音を立てないように静かに軽やかに地面におろすステップを踏んでいる。相棒はそれに合わせて真っ直ぐに立ち、左手を高く掲げてタンバリンをかき鳴らしている。彼はまた楽器の音と踊りを調和させるために相棒の動きに注意している。動きのない絵画に、こうした踊りでなくてはどのようにして生き生きとした運動を表現できただろうか。この木は、二人に爽やかで

うれしい陰を提供しているだけでない。赤く黄色く色づいた果実を実らせて他のクピドたちを樹上へと招いている。小柄なクピドたちの身の丈に合わせて果物を届け、彼らを満足させたいのに、たわわに実った枝をこれ以上曲げられないのを申し訳なく思っているような、そんな雰囲気である。クピドたちで最も大胆で身軽な者が、少々苦労して自分の好きなだけ果実をとった様子で、この木が周りに広げた大きな枝のうえに、のんびりと足を組み合わせてうつ伏せに寝そべっている。その姿はまるで安楽なベッドの上に寝ているようで疲れた感じはまったくない。このクピドは左手で枝につかまり、右手を上手に用いて果実を下にいる仲間たちに投げつけている。たぶん、果実をひどくぶつけられたのだろうが、その一人は仕返しするために地面に落ちた果実をたくさん集め、樹上のクピドにひけをとらないよう女神のベッドによじ登っている。このクピドは、女神の眠りを覚ますのをおそれて相手が果実をひどく投げられないだろうと賢く考えを巡らせているのだ。右手には果物をしっかり掴み、左手は顔の前に回して実をぶつけられるのを防いでいる。そして右手を肩の後ろに引き、タイミングを整えて力一杯、果実を投げつけようとしている。このクピドは、よく考えなかったのだろうが、最初は全身が陰に隠れていたのに、後ろに下がって体を引いたために肩から頭にかけて木漏れ日を真正面から受けてしまった。このせいで、敵をしっかり見定められないうえに自分の顔が格好の標的となっているのだが、クピドの顔つきは激しく怒って興奮しており、怒りに燃える生き生きした両目の輝きは見事である。全く、このクピドが実際に生きていたとしても、石を投げようとする力強さや心中の感情をこれほど見事に示しはしないだろう。一方、樹上のクピドの脇腹と肩、それに右頬はやはり木漏れ日に照らされており、相手のクピド同様、実に生き生きと見事に浮き立っている。彼の両目はこの光に妨げられるどころか、助けられている。また、果物を下に向かって投げるのにはさしたる力が要らないことをよく知っているので、ごく気軽に手を挙げて投げつけており、相手にいくつも命中させて、その怒りをさらに燃え立たせている。このクピドは今まさに相手をからかい、脅しながら果物を投げつけようとしているように見受けられる。その間、他のクピドたちもこの魅力的な遊びに引きつけられ、その一人はさっそく木に登って、最初の木の股まで達している。そして彼は木の幹に左手でしっかり掴まり、頭を下に向けて右手を伸ばし、別のクピドが登る手助けをしている。このクピドは、一人では、登ることもできないし、木の枝に手を掛けることもできないのだ。さてこの下にいるクピドは色白で柔らかい肌をしており、一見して柔弱で、もう一人別のクピドに助けを求めている。つまり別のクピドが下から彼を押し上げている。彼はこのクピドの肩と

左手に足を乗せて、もう片足は地面近くに残った枯れ枝に掛けている。細い左腕を大きな幹に回しているが、それも空しく、精一杯伸ばしている右手を樹上のクピドが掴んで持ち上げようと力を込めている。だがこのクピドより下で支えるクピドに頼る方がよさそうだ。下のクピドの方ががっしりと成長した体格で、膝をしっかり地面に付き、右手を切り株にかけて支えているからである。このクピドは左肩と腕を使って、仲間を力強く支え持ち上げている。これら 3 人のクピドはいずれも精一杯力を込めている様が看取され、誰が最も力を発揮しているか見分けがつかない程である。ともあれ、上にいて引き上げようとするクピドと下から支えるクピドの二人のうち、特に下から支えるクピドは、力の漲る四肢が見事に表現されており、見る者はその体に触れてみたくなるほどである。実際、脇腹から肩、背中にかけて筋肉が盛り上がり浮き立っており、他の二人より力で勝ることは容易に納得できるだろう。木に登ろうとするクピドは木の幹に顔を向けているので、その苦労や怖がる様子は見えないが、その叫び声や、しっかり掴んでくれるよう頼む声が聞こえるようである。これら 3 人のクピドがこのように戯れて楽しんでいる間、木登りが気に入らないクピドたちは、小鳥よりむしろ魚の仲間入りしている。これは分別ある画家がしばしば用いる考案だが、アモールは炎のように燃え上がるものなのに、地上や空中で遊び回るだけでなく、水遊びも大好きなことを分からせるのである。というのは、アモールは火の元素だけでなく全ての元素、あらゆる被造物を等しく自分のものとして支配するからである。さて、画面のやや奥、草原を流れるせせらぎの透き通って輝く小さな池にアモールたちが入って、そのうちの二人は楽しみながらしっかり泳いでおり、二人の腕は水面に波を立てているのがはっきり見える。その様子は、小舟が櫂の一漕ぎで滑るように進むのと同様である。彼らが遠くにいるのでまるで薄いガラスを通すように水中の白い肉体を見るのはできないが、水に濡れた頭髪が捩れて額やこめかみや首に張り付いている様子は見える。一人のアモールは顔を向こうに向けているが、抜き手の力強さは表れている。こちらを向いて、まるで笑っているかのような悪戯っぽい眼差しを向ける泳ぎ手を見て、彼と同じ楽しみを感じてもよい。このアモールは自在に泳ぐほどの技量がなく、こちらまで泳ぐかどうか決めかねているように見えるかもしれない。ともあれ、その身振りはとりわけ表現力豊かで、生命そのものが欠けているだけと思えるほど現実的で単なる絵空事を超えている。一方、3 人目のアモールは、十分に泳いで疲れたのか、この池の緑豊かな向こう岸によじ登り右膝を岸について体を引き上げている。その間、彼の腰や両脚から足下に水が滴り落ちている。彼は濡れているために体の出っ張った部分が際だって明るく照らされている。

ひょっとしたらこのアモールは、賞賛の声や拍手を耳にして、別の 3 人のアモールのうち誰が見事に的に命中させたのか目にしたいと思って急いでいるのかもしれない。これら 3 人のアモールはさらに奥まったところにいて、周りの騒ぎに構わず、実用に役立てようと、自分たちの仕事に必要不可欠な弓の稽古に励んでいる。そのために、背の高い木の幹に木製の大きな盾をかけ、的とするべく真ん中に赤いハートを描いている。すでに幾本もの矢が射られているのだが、ハートの周りにはあたっても、それに的中した矢はまだないのが見える。競技参加者は皆が苛立って、競争心に駆り立てられ、懸命に賞賛を得ようとして、矢を射るのを止めようとしなかったのだが、ついに彼らのうち最も左にいるアモールの矢がハートを射抜いて、皆が歓声を上げたところなのである。彼の競争相手も敵愾心から負けられないと弓を引き絞り、注意を集中して的を狙っている。このクピドたちは先に挙げたクピドたちよりも遠くに見えるが彼らは、肉体の動きだけでなく心の様もはっきりと示している。つまり一人は一仕事終えてほっとしたという感じで楽しげで晴れやかな顔つきであり、右手に持つ弓の角を地面に立て、競争相手が的をしっかり狙っているかどうか、的に的中させるかどうか、注意深く見守っている。一方、このアモールは緊張して、的に当たらないのではないか、恥をかくのではないかという不安にも苛まれている様子である。もし彼の胸に手を当てて見ることができれば、その心臓は平素よりもずっと早く脈打っていることだろう。こうした様子は見る者をことのほか喜ばせるものだが、逆に、絵画芸術が過去に起こった出来事がはっきり分かる手がかりを提供するだけでなく、その後に起こるだろう出来事のヒントを与えていなければ、鑑賞者をがっかりさせてしまう。さもなければ、アモールが射た弓がどうなったかとか、彼が相手に勝つのか負けるのか、知りたいという願いが叶えられないからである。さて、3 番目の競技参加者は、幾本かの矢を的から外しただけでなく一本は的の盾にも当たらなかったため同僚たちに失笑されたのか、他の二人に勝ることはもちろん、対等に腕を競うことさえあきらめて、草むらに寝転がっている。このクピドは二人の足下で腰を下ろして寝そべって他の二人の射る様を眺めている。彼は、あまりにも長いこと中空に持ち上げて疲れた両腕を草むらで癒し気分を一新して的を狙おうと考えているのかもしれない。彼は静寂を妨げていないし付近のあちこちで騒ぎ回る他のアモールたちのようにはしゃぎ回って弓を射る他の二人の集中をかき乱したりもしていない。射的の少し先では、見事な緑のきづたの冠を賞品として招かれた幾人かのアモールたちが競技に取り組んでいる。二人のアモールはすでに軽い手合わせは終わったらしく本格的な取っ組み合いの真っ最中で、技量を尽くして相手を地面に投げつけようと必

死だがどちらが勝つとも予断を許さない状況である。二人とも疲れて息切れしており、一緒に地面に倒れかねない様子だ。組み合う二人の四肢の曲がる様や捻れた様子を生き生きと表現する画家の技巧は実に見事で、じっくり眺める者には二人の体が実際に動いているようにさえ見える。もしこんなに遠くなかったら、二人の体の汗が見え息づかいも聞こえるだろうが、それでも、一つ一つの動きや身振りを区別できないほどではない。両者の向こうできづたの冠を右手に掲げて立ち、相手を打ち負かそうと競う二人に示しているアモールの仕草も明瞭に見える。彼は片方に声援を送って力づけ、もう一方の失敗を責めて奮い立たせ、両者をともにいっそう頑張るよう励ましているのである。同時に、彼は大声を上げて、自分の左側に立ち、小さな二連小太鼓を勇ましく打ち鳴らす相棒に唱和している。このアモールは二連の小太鼓を体の前に上手につり下げ、格闘する二人の方に頭を少し傾けて、二人の動きに注目し、太鼓のリズムを格闘の様子に合わせ、ばち捌きと太鼓の音で二人の対決をいっそう盛り上げようとしている。太鼓をたたく様子は、これを見る者は誰であれアモールの姿を見るだけでなく太鼓の音も聞こえると白状せざるを得ないほど際だっている。さて、さらに幾人かのアモールたちがその向こうで子供っぽい遊びに興じている。とりわけ、大胆にも女神が所有する二羽の純白の鳩をやはり女神の黄金に塗られた二輪車に繋いでいるアモールたちがいるが、単に考えが足りないからなのか、それとも冗談ゆえにか、車の前後を逆にして反対向きに引かせている。その中で体格に優れ、仲間たちで最も元気のよいアモールが二輪車の背に胸を預けて手綱を引き、左脇から背中にかけての部分をこちらに向けている。彼が御者を勤めているのは疑いない。このアモールは両腕を広げ、両手に手綱をもって激しく振りながら車を先へと急がせている。手綱を操りながらかけ声をかけて臆病な鳩たちができるだけ早く進むように叱咤激励している。だが二羽の鳩は、奇妙な繋がれ方にとまどい、いつもやさしく手綱を使う女主人とは違う者に御されているのに気づいて普通以上に怯えている。鳩たちは翼をばたつかせ、うめき声を上げながら必死に車を引いている。鳩たちがこれら小童たちと同じくらい力があって大胆だったら、不注意のため不幸な目にあったパエトンに太陽の馬車の雄々しい馬たちがやったように、彼らに車の御し方を教えたことだろう。車に座って乗っている二人のアモールのうち一人の表情に、喜びと不安が入り交じっている様子が実に見事に現れているのは感嘆に値する。このアモールは両手でできるだけしっかり車の右側に掴まり、車がすばらしい速度で走るのをいささか怖がっているが、同時にそれを楽しんで、文句を言わず一人で喜んでいる様子もわかる。彼の向こうに並んで座るアモールはずっと奥に引きこもって、怖がっている

のを知られたくないふうだが、奥で縮こまっているから、恐れる様子がいっそうよく分かるのである。車の騒音で聞こえないだろうが、彼らが悲鳴を上げて泣いているのは確かだとわたしは信じる。だが、仲間たちがどんなに怖がってしがみつこうとも、御者をつとめるアモールは、速度の快楽に夢中になって、耳を貸そうともしない。何かただならぬ事故でも起こして止まるのを余儀なくされない限り、彼を留めるすべは無さそうである。彼らは好きに遊ばせておくとして、この絵に描かれた範囲の外にもクピドたちが沢山いることは間違いないが、これ以上、考察することはできない。他のクピドたちを見れば、それもきっと喜ばしいだろうが、ここでクピドたちを離れて、遙か彼方まで入念な透視図法構成で眼前に描き出された、美しく優雅にひろがる緑野の様を描写することにしよう。改めてこの情景に注目し丹念に見ると、実際の絵では全体を一度に触れ得るほどなのに、人物や木立、野原などが配されたその間隔には真の大気が満ちあふれているようである。また、あらゆる事物を自然そのままに見事に表現するだけでなく、陰影を巧みに配して立体感や奥行きを現出し際だたせる、その技巧は全く素晴らしい。現実そっくりというよりむしろ、現実そのものだと断言されよう。画面に近づけば、手を伸ばして人物像に触れ、肌の柔らかさや肉付きを試してみたいという気持ちを押さえるのは困難である。果実をつけたあの巨木の陰に立って二人のクピドたちの踊りを楽しみたいという強い願望にもとらわれるだろう。そこに立てたら、果実を投げつけているクピドの真下にいることに気づき、果物をぶつけられぬよう、あわてて頭を手で覆うだろう。ここには少し留まるだけで、澄みきった水をたたえる池やそこで泳ぐクピドたちの騒ぎに誘われ、池まで行くだろう。そこからさらに、池を越えて進み、他のクピドたちの遊びを眺めるだろう。実際、この草原はなだらかで気持ちよく、あちこち歩き回るのもよいし、木陰で憩うのにも最適なのである。しかしながら、わたしは、誰であれ、この地に足を踏み入れたいなどと考えないように忠告したい。わたしの間違でなければ、クピドたちの遊びを眺めることよりも、神々しく類い希な女神の美しさにあなた方は強く引きつけられるだろうし、その美しさをより詳細に鑑賞しようとベッドに近づくだけでなく、ベッドの上に乗ろうとさえするだろうが、それは、もし女神のめがねに適わなければ、彼女の怒りを呼び、罰せられるという大きな危険を冒す所行である。だから世の男性たちは皆、わたしの忠告を受け入れて、女神を鑑賞するのは程ほどに、他の素晴らしい事物の数々や特にクピドたちの生き生きした表情、そして彼らが、それぞれ全く違った雰囲気を持ち、それぞれ違った顔立ちだし、肉付きや体の色合いも異なっている（これはそれぞれの性格や感情に応じて違っている）のに誰もがきわめ

て愛らしい、その様子をじっくりと眺めた方がよい。優美で釣り合いのとれた四肢、色彩の見事さ、陰影のみずみずしさ、自由闊達な体の動き、遠近表現の的確さ、自在な筆使いが、渾然一体となっている。この作品は、同様に素晴らしい作品の数々と同じく、アンニーバレ氏が、準備素描なしに一気呵成に描き挙げたのである。こうしたことは、当世の他の画家たちでも、全部は無理でもやってやれないことはない。だが、喜びや悲しみ、大胆さと怯え、怒りと心地よさ、愛と嫌悪、その他様々な心の動きをはっきりと表現する事は別である。これは、わたしの信じるところによれば、アンニーバレ氏だけが持つ優れた才能であり、この点で彼に並ぶ者をわたしは知らない。こうしたことは技巧をいくら学んでも獲得できるものではなく、詩人たちの中で最も優れた者たち同様に、生来の才能を持つか、神の息吹に触れるかした者である必要があると、わたしは知っているのだが、アンニーバレ氏はこうした才能の持ち主だったことが、はっきり示されている。さて、これでわたしは、満足して筆をおかねばならない。わたしはすでに、わたしが眺めた限りにおいて、この作品と、そこに登場する人物たちを叙述し終えたのだから。

アンニーバレ・カラッチ《眠れるヴィーナス》190×328cm
Chantilly Musée Condé